
ミリねのつぼみ
おむつピース

「はぁ〜……疲れた」

恋川舞結（こいかわまゆ）、二十五歳。大学を卒業して憧れの広告代理店に就職したものの、想像していたようなキラキラとした生活とはほど遠い日々を送っている。

同僚から押し付けられた仕事を片付けていたら、今日も会社を出るのが遅くなってしまった。オフィス街から駅へと続く道に、人影はほとんどない。

（もっと、要領よく立ちまわれればいいんだろうけど……）

就職してから、雑用ばかり押し付けられている気がする。頼まれたら断れない性格が災いして、どんなに忙しくても安請け合いしてしまうせいだろう。そういうのが良くないって、分かってはいるんだけど……

慌ただしい毎日を過ごしているうちに、いつの間にか季節は初夏になってしまった。日中ほどではないけれど、この時間になっても空気はじっとりしていて蒸し暑い。

今から電車に乗って、家に帰ったらシャワーを浴びて……晩ごはんは、会社で食べたカロリーバーでいいや。とにかく疲れたから、さっさと布団に入って寝よう。短い睡眠時間じゃ疲れは取れないだろうけど、起きたらまたすぐ出勤しなきゃなんないから、一秒でも長く布

団に包まっていたい。

そして会社に戻ったら、前の日にやり残した仕事を確認して、その日にする仕事の段取りを考える。抱えていた厄介な仕事は一段落しているから、明日こそは早く帰れるだろう。そう期待したいところなんだけど……

明日もまた、勤務時間中はおしゃべりに花を咲かせている同僚が、定時になったら私に仕事を押し付けて帰っていくのだろう。そんな彼女を恨めしく見送りながら、残業をするんだ。

なんてツマンナイ毎日なんだろう。

帰ってもすることがない、ってのも良くないんだと思う。仕事が趣味というわけじゃないんだけど、仕事以外にとくにすることがない。ただの無趣味とも言う。

（あーあ。私も、なにか癒されるような趣味が欲しい！）

私は歩道を歩きながら、スマホを取り出した。

ペットを飼うのは今のアパートじゃ無理だし、旅行をするくらいなら家でダラダラしていたい。それなら、マッサージはどうだろうか？

「……あれ？」

検索結果の中に、気になる広告を見つけて、画面をスクロールする指がピタリと止まる。

「『リリカの添い寝セラピー』……？」

広告バナーに書かれた可愛らしい文字を、私は読み上げた。
画像をタップしてみると、お店のホームページが現れる。
「いつも頑張っている、寂しがり屋で甘えん坊のあなたに、最上級の癒しを……？」
キャッチコピーの下には、お店の写真が何枚か載っていた。
（わぁ……すっごく可愛いお部屋……）
全体的にピンク色でコーディネートされたお部屋の真ん中にあるのは、まるでお姫様が寝るような豪華なフレームのベッド。そして、レースとフリルがふんだんに使われたピンク色のシーツの上には、ウサギさんとクマさんのぬいぐるみが並べて置かれている。私にはそれが、まるでウサギさんがクマさんに添い寝をしてもらっているように見えたんだ。
「……いいなぁ」
自分がウサギさんになって、クマさんに添い寝をしてもらう姿を思い浮かべたら、心の声が漏れてしまった。
会社では色んな人に仕事を頼まれるので、『頼りになるお姉さん』だと思われているのだろう。だけど、本当の私はそんなんじゃない。
（私だって、誰かに甘やかしてもらいたいのに……）
そんなことを考えながら歩きスマホをしていた私は、うっかり小さな段差につまづいてし

まった。

「きゃっ……！」

数歩よろめいたものの、なんとか転倒することは免れた。

だけど、ホッと胸を撫で下ろしたとき、手元からプルルル……という小さな電子音が聞こえてきた。

「え……？」

スマホ画面を見てみると、『発信中』となっている。手が滑って、うっかり発信ボタンを押してしまったようだ。

慌てて画面を消そうとしたけれど、私が終了ボタンを押すより早く、電話が繋がってしまった。

『はーい。リリカの添い寝セラピーです。ご予約ですか？』

「あ、あの……えーっと……」

電話の先から、ハスキーな女性の声が聞こえてきた。サイトには『リリカのお部屋』って書いてあったから、この人がリリカさんなのだろうか？

「わ、わたしは……」

ちょっと気になってホームページを見ていただけで、実際に予約するかまでは考えていな

かった。

だから、まだこの段階であれば「間違えました」と言って、通話を切ってしまってもよかったとは思うのだけど……

『はじめまして、リリカです。お姉さんのお名前、聞いてもいいかな？』

「あっ！　えっと、その……ま、舞結……です」

『舞結ちゃん。今日はどうしたの？』

「えーっと……、あの……」

（どうしよう……）

予想外に電話が繋がってしまったものだから、何から話せばいいのかわからない。

「ゆっくりでいいよ。リリカに教えて」

なかなか言葉が出てこない私に、リリカさんはそう言ってくれた。その優しい声に、私は甘えたくなってしまったんだ。

「わ、私は……今日、すごく疲れてて……ってのは、じつは……」

一度しゃべり始めると、心の奥で凝り固まっていた想いがポロポロと零れ出してきた。

リリカさんは、そんな私のとりとめのない話をただただ聞いてくれた。

『うんうん。それで、どうしたのかな？』

「だから、誰かに癒してほしくて……」
『そっかあ……舞結ちゃんは、ずっと頑張ってたもんね』
リリカちゃんのそのひと言で、今までの自分が救われた気がして、私はなんだか泣きそうになってしまった。
（電話が繋がっちゃったのは偶然だったけれど、リリカさんとお話ができたのは良かったかも）
ほんの少しではあるけれど、リリカさんと話をしたことで、擦り減っていた心が癒された気がする。
『ねえ、舞結ちゃん』
「あ、はい」
『今夜、リリカが舞結ちゃんに、添い寝してあげよっか？』
「えっ!?　今から……？」
終電までにはまだ少し時間はあるものの、他人の部屋を訪れるにはちょっと遅い気がする。
「で、でも……」
添い寝に興味がない、と言ったら嘘になる。
だって、ホームページを見て「この部屋に行ってみたい」と私は思ってしまったのだから……

『今からリリカが、お疲れの舞結ちゃんをたっぷり甘やかして、いっぱいヨシヨシしてあげるよ』

それは、今の私にとっては魔法の言葉だった。

『どうかな？』

「わ、私……」

リリカさんにたっぷり甘やかされたいという思いはあるけれど、こんな時間にリリカさんのお部屋を訪問するなんて迷惑ではないだろうかと怯んでしまう。

『舞結ちゃんの本当の気持ち、教えてくれるかな？』

「私は……」

大きく息を吸って、吐いて。そしてまた吸った。

「私は、リリカさんに添い寝してもらいたいですっ！」

普段の自分なら、絶対にこんなことは言わなかっただろう。

だけどさっきの素敵なお部屋の写真と『添い寝セラピー』という単語の魅力に抗えなかった私は、リリカさんの優しい声に背中を押されて、そう言ったのだった。

セラピールームは、オフィス街の裏手のマンションの一室にあった。

（まさか……私が電話を掛けていた場所から、歩いて五分もかからないなんてね……）

おかげで、心の準備がほとんどできないままリリカさんのお部屋に辿り着いてしまった。

しばらく部屋の前のインターフォンを見つめていたけれど、ここまで来たんだ。躊躇っていても仕方がない。

何度か大きく深呼吸をしてから、私は意を決してインターホンを押した。

ピンポ〜ン。

軽やかな音が鳴り響いた後、ガチャリとドアが開いた。

「は〜い！　あなたが舞結ちゃん？」

中から出てきたのは、小柄で可愛い女の子だった。

ピンクがかった茶髪は緩くパーマが掛かっていて、くすんだピンク色のブラウスに、黒いスカートを穿いている。

「あ、はい。えっと……貴女がリリカさんでしょうか……？」

「そうだよ。リリカって呼んでね」

電話越しの落ち着いた声から、相手は自分よりも年上の女性だと思っていたのに、目の前にいるのは想像していたよりずっと若い子だった。もしかしたら……というか、多分、私のほうが年上だろう。

「えーっと、じゃあ……リリカちゃんで……」
「まぁ、それでもいっか。どうぞ、入って入って～」
自分よりも若くて可愛い女の子に、私は今から何をお願いしようとしているのだろうかと怯んでしまう。だけど、リリカちゃんはそんなことを気にする様子もなく、私を室内へと招き入れる。
戸惑いながらもリリカちゃんの後をついて廊下を歩いていくと、セラピールームになっている寝室へと連れていかれた。
「わぁ……」
そこは写真で見た通りの可愛いお部屋だった。中に入ると自分がお姫様にでもなったような気分になって、一瞬でテンションが上がる。
「ここに座って」
ベッドを勧められて腰を掛けて、正面に立ったリリカちゃんを見上げる。
「リリカのお部屋は、あなたがあなたらしく居られるお部屋だよ。だから、ありのままの舞結ちゃんを見せてほしいな」
「う、うん……」
頬っぺたに触れてきたリリカちゃんは、私の顔を見ながらそう言った。

「ところで、舞結ちゃん。最近、あんまり寝れてないんじゃない？」
「えっと……」
「目の下、クマできてるし、お肌もお疲れ。だからリリカが、ちゃーんと癒してあげるね」
そう言ったリリカちゃんが、ぎゅっとハグをしてくれる。
（リリカちゃんって……おっぱい、大きい……）
柔らかい二つの膨らみが、私の顔に当たっている。
不意のスキンシップに一瞬身構えてしまったけれど、嫌な感じとかは全然ない。
（なんか、リリカちゃんの体温ってホッとするな……）
久しぶりに触れた人の温もりに、私は妙な安心感を覚えて体の力を抜いた。
すっかり身を委ねてしまっている私の頭を、リリカちゃんは優しく撫でてくれる。
「……それじゃあ、まずはお着がえをしてもらおうかな」
しばらくハグをした後、リリカちゃんはそう言ってクローゼットへ向かった。
「お着がえ……？」
「だって、その格好じゃ、リラックスできないでしょ？」
「……たしかに……」
今、私が着ているのは、仕事をするための洋服だ。

シフォン生地のカットソーに薄手のジャケットを羽織って、ピシッとしたタイトスカートで『しっかり感』を演出している。

こんな格好で添い寝をしてもらっても、十分にくつろげないだけでなく、お洋服がシワになってしまうんじゃないかと気になって仕方がないだろう。

着替えなんて持ってきていないけれど、どうやらリリカちゃんが貸してくれるらしい。

（どんなお洋服を貸してもらえるのかな）

ウキウキしながらジャケットを脱いだら、リリカちゃんが着がえを持ってきてくれた。

（あっ！　可愛い……）

ベッドの上に置かれたのは、胸元にピンクのリボンがついた、フリルいっぱいのとっても可愛いパジャマだった。この部屋の雰囲気にとても良く似合っていると思う。

だけど、私は自分がこの可愛いパジャマを着ている姿を想像して、唇をきゅっと結んだ。

「あの……リリカちゃん……」

「なぁに？」

「このパジャマなんだけど……何か別のものはないかな？」

すごく可愛くて素敵なパジャマではあるものの、だからこそ私なんかが着ていいものではない気がする。

「あれ!?　このデザインは好きじゃなかった？」
　パジャマを置いた後、クローゼットとは反対側にある棚に何かを取りに行っていたリリカちゃんが、振り返って聞き返した。
「そうじゃないんだけど、私には似合う気がしなくて……」
　このパジャマは、背が高くて地味な顔立ちをした私ではなく、小さくて可愛いリリカちゃんみたいな女の子のために作られたものじゃないかと思う。
「リリカは、このパジャマは舞結ちゃんによく似合うと思うよ！」
「でも、こんなのは着たことがないし……」
「じゃあ、今日、着てみればいいんだよ。何事にも初めてのときはあるんだから」
「う、うん……」
　そう言われてしまうと、強く言い返せない私は頷くしかなかった。
「それから、今日はこれも使おうね」
「……え？」
　再びベッドまで戻ってきたリリカちゃんが手にしていたのは、見慣れないもの……いや、見慣れないというか。普段、自分では使うことがないので、馴染みがないものだった。
「えーっと、それって……」

「紙おむつだよ」
「そ、そうだよね……」
やはり、私の見間違いではないようだ。
リリカちゃんが私に向かって差し出したのは、赤ちゃんが穿くような可愛い柄の紙おむつだった。だけど、赤ちゃんのサイズにしては随分と大きく見えるから、きっと大人用のものなんだろう。
（でも、なんでおむつなんて……？）
今からリリカちゃんに添い寝をしてもらうのだから、パジャマに着がえるのはわかるのだけど、一緒におむつが出てくる意味がわからない。
「それじゃあ、バンザーイしよっか」
リリカちゃんが私の前に立って、顔を覗き込んできた。まるで、大人がちっちゃい子に目線を合わせるみたいな体勢だ。
でも、私はちっちゃい子なんかじゃない。もうイイ歳をした大人だ。
「き……着がえくらい、ひとりでできるよ!?」
「いいから、いいから。それに、おむつの子はひとりでお着がえできないでしょ？」
「私、おむつなんか……」

穿かないよ、と言いたかったのに、リリカちゃんに「だめだめ」と、言葉を遮られてしまった。

「おむつ、するのとしないのとじゃ全然違うんだよ！　いいから、リリカに任せて」

「でも……」

「一回おむつを穿いてみて、どうしても〝違うな〟って思ったら、次からは穿かなくていいから。ね？」

「う、うん……リリカちゃんがそこまで言うなら……」

優しいのに、どこか有無を言わさない口調で言われて、私は仕方なく頷いた。

『次、またここに来ることなんてあるのかな？』って、頭の片隅で思ったけれど、こんなに熱心に言われたら、断ることなんて私にはできない。

それに、電話をしたとき、約束したんだ。

『リリカのお部屋に入ったら、ちゃんとリリカの言うこと聞いてね。そしたら、ありのままのあなたを全部、受け入れてあげるから』って。

（だから、リリカちゃんの言うことは、ちゃんと聞かないと……）

「じゃあ、バンザーイして」

リリカちゃんに言われて両手を上げると、着ていたカットソーをスポンッと脱がされてし

まった。

自分でできることをわざわざ他人にやってもらうなんて、なんだか自分が、一人では何もできないちっちゃい子にでもなってしまったような気分だ。

それが恥ずかしくてモジモジしていたのに、そんなことはお構いなしに、リリカちゃんは私のインナーもブラジャーも取り払ってしまった。

「次はこっち」

リリカちゃんが私の腰に触れたので、ベッドから立ち上がる。

ファスナーを下ろして、穿いていたスカートを脱がされた後、パンストも脱がされた。

そして最後に残されたもの……私の大切な場所を隠しているショーツにもリリカちゃんが触れて、ゆっくりと脱がしてくれた。これを脱いでしまったら、私は……

「すっぽんぽんになっちゃったね。まるで、生まれたての赤ちゃんみたい」

リリカちゃんにそう言われて、私は頬がカッと熱くなるのを感じた。

「舞結ちゃん、とっても可愛いよ」

さっきまでの私は、少しでもしっかりもののお姉さんに見えるような格好をしていたはずだ。

大人っぽいデザインのお洋服を着て、目元だってキリッとするようにアイラインをちょっとだけ上向きに引いて……

本当は子供みたいに可愛いお洋服を着たいのだけど、私は大人だから。社会人として相応しい格好をしなきゃならい。ずっとそう思っていた。

服装だけでも大人っぽくすれば、仕事のできる女になれる気がしていたんだ。

それなのに、リリカちゃんに着ているものを全部脱がされてしまうと、私を飾るものも、身を隠すものも、守ってくれるものも、何一つなくなってしまった。

こんな自分を晒していることがなんだか不安になってきて、私は自分の身体を自分でぎゅっと抱きしめる。それでも不安がぬぐい切れず、私は縋るようにリリカちゃんに視線を向けた。

「あ……」

リリカちゃんと視線が合う。その表情は慈愛に満ちていて、まるで聖母のようだと思った。

その時、私はこの部屋に来たときにリリカちゃんが言っていたことを思い出した。

――リリカのお部屋に入ったら、ちゃんとリリカの言うこと聞いてね。そしたら、ありのままのあなたを全部、受け入れてあげるから――

つまり、ここでは背伸びする必要なんてない。私が自分らしくいてもいい場所なんだ。

そう思ったら、なんだか気分が高揚してきた。

「じゃ、次はおむつ穿こっか」

リリカちゃんに言われて、私はコクリと頷く。
「転ばないように、私の肩につかまって」
そう言われて、床に膝をついたリリカちゃんの両肩に手を添えた。
私は右足を上げて、その後、左足も上げた。タイミングを合わせて、リリカちゃんが順番に足をおむつに通してくれる。
両足が床についたら、次はウエスト部分を持っておむつが引っ張り上げられる。それで、私のお尻はすっぽりとおむつに包まれてしまった。
お股の部分が隠れると、さっきの心細さが随分と和らいだ。
「ね、おむつもイイでしょ？」
「う……うん……」
リリカちゃんに言われて、私は曖昧に頷く。
たった今、リリカちゃんに穿かせてもらったおむつに触れてみる。
カサカサとした手触りの紙おむつは、普段穿いているショーツに比べたら、お尻を覆う部分が大きくて、全体的に分厚く感じる。とくに、お股のまわりがモコモコしているから、ぴったりと脚を閉じることができなくて、ややガニ股気味になってしまった。
（でも、これはこれで悪くないかも……）

お尻を包み込んでくれる分厚いおむつに、私は妙な安心感を抱いていた。
「風邪をひかないように、パジャマも早く着ちゃおうね」
寝室の冷房は温度が高めに設定されているのか、寒さは全く感じなかったけれど、リリカちゃんに早くお着がえの続きをしてほしいと思った私は、コクコクと頷いた。

「うん。やっぱり可愛いねっ！」
お着がえが終わると、リリカちゃんは私を上から下まで見てそう言った。
「そ……そうかな？」
リリカちゃんが着せてくれたパジャマは、大きな襟の後ろにウサギの耳がついていて、思っていたよりもずっと可愛らしくて子供っぽい。
「舞結ちゃん。ここは『そうでしょ』って言わなきゃ。わかった？」
こんなテイストのお洋服を着たのは初めてだから、やっぱり全然似合ってないんじゃないかって不安になってしまう。それでモジモジとしていたら、ぷぅっと頬を膨らませたリリカちゃんに、注意されてしまった。
「あ、うん……」
「じゃあ、やり直しするよ」

せっかくリリカちゃんが「似合ってる」って言ってくれたんだ。私はその言葉を信じてみたい気持ちになった。

「舞結ちゃん、可愛いね！」

「そ……そうだね。あの……ありがとう……」

素直に頷いてみると、なんだかこのパジャマが本当に自分に似合っているんじゃないかって思えるようになってきた。それよりも……

（素直に誉め言葉を受け取るだけで、こんなに嬉しくなれるんだ……！）

いつもであれば「どうせ私なんて」って思っては気分が沈んでしまう私だけど、リリカちゃんといるとなんだかフワフワと心が軽くなっていくのを感じる。

「それじゃあ、次は寝てもらってもいいかな。添い寝してあげるね」

「あっ！　う、うん……！」

まだ着がえさせてもらっただけなのに、すっかり満足してしまっていた。

（私は今日、添い寝をしてもらうために、ここに来たのに……）

本当の目的を忘れかけていたことを誤魔化すように、私はいそいそとベッドに上がる。

掛け布団は大きく捲られていたので、私は枕に頭を置いてベッドの上で仰向けになった。

柔らかいマットレスが私を優しく支えてくれて、背中を置いた瞬間、肩と腰から力がスッと

抜けるのを感じる。シーツの肌触りもとても良くて、ここで寝たらどんな疲れだって吹っ飛んでいってしまうんじゃないかって思った。

私が寝心地に感激していると、リリカちゃんがベッドに上がってきた。

誰かに添い寝なんてしてもらうのは初めてだから、だんだん緊張してくる。

（寝るのは仰向けでいいのかな？　それとも、横を向いたほうがいいのだろうか？　それなら、リリカちゃんの方を向く？　いやいや、それだとなんだか恥ずかしい気がするから、背中を向けたほうが……って、そっちを向いたら、リリカちゃんを拒絶しているみたいじゃない……！）

どんな体勢を取るのが正解なのかわからなくなってきた私は、ベッドの上で身体をモゾモゾさせた。

「舞結ちゃん、緊張してる？」

「えっと……ちょっと、だけ……」

考えれば考えるほど、どうしたらいいのかわからなくなってしまっている私は、緊張しているというよりも混乱しているといったほうが正しいのかもしれない。

「じゃあ……添い寝の前にマッサージしてあげるね。リリカ、上手なんだよ！」

「マッサージ……？」

添い寝をしてもらうだけのつもりだったのに、お着がえまでさせてもらった上に、マッサージまでしてもらっちゃうなんて……

「えっと、そんなことまでしてもらって……いいのかな？」

「いいの、いいの。今日はリリカが舞結ちゃんのことを全力で癒してあげる日なんだから。遠慮なんて、しちゃダメだよ！」

「う、うん……」

せっかく、リリカちゃんのお部屋に来たんだ。それなら、いっぱい甘えさせてもらおうかな。そう思った私は、頷いた。

「じゃあ、うつ伏せになって」

「うん」

そう言われて、私は体勢を変える。

枕に顔を埋めたら、リリカちゃんが私の背中をぎゅっぎゅって押してくれた。

「うわー、凝ってるね……舞結ちゃん、頑張りすぎだよぉ」

「んっ……あぁっ……」

あまり自覚はなかったけれど、私の身体は凝り固まっていたらしい。背中を押されるたびに、思わず声が出てしまう。

（だけど、すごく気持ちイイ……）

しばらくマッサージをしてもらったら血行が良くなったみたいで、なんだか身体が軽くなってきた気がする。

「どう？　気持ちいい？」

「うん……」

気持ちよすぎて、なんだか眠くなってきてしまった。気を抜いたら、今すぐに寝落ちしてしまいそうだ。

（今、寝てしまうのは、ちょっとまずい気がするけれど……）

私はモゾモゾとお尻を動かした。さっきから、お腹の下のほうがムズムズしている。

「そう？　よかったぁ！　次は腰回りも揉んであげるね！」

「ひゃあんっ！」

リリカちゃんに腰をぐっと押されて、思わず変な声が出てしまう。

「あ……そ、そこ……は……」

「やっぱり。ここも、すっごく凝ってるよぉ」

リリカちゃんの力加減は絶妙で、とても気持ちがいい。だけど、今、その場所を押されるのだけは、ちょっとマズいんだ。

「う、あ……そこは、押さなくて大丈夫っていうか……」
ぐっぐっと手のひらで広い範囲を力強く押されると、お腹がベッドに押し付けられてしまう。
「なんで？　しっかり解しておかないと、疲れは取れないよ？」
「うん……それは、そうなんだけど……」
私はモゴモゴと口ごもった。
リリカちゃんのマッサージは、いつまでも揉んでもらいたいと思ってしまうくらい気持ちがいい。だけど、私はこのまま気持ちよさに身を委ねて、微睡んでしまうわけにはいかないんだ。
「舞結ちゃん。どうかした……？」
「えっと、それは……」
今、自分が置かれている状況をなんと説明したらいいのか。
「もし困っていることがあるなら、リリカに教えてくれないかな？」
「ええと……」
言いかけてはやめてしまう私の言葉を、リリカちゃんはじっと待ってくれた。
「だから、その……そこを押されたら……」
ちゃんと言わないと、大変なことになってしまう。そう思うんだけど、そのことを口にす

るのはちょっと恥ずかしい。
「もしかして、痛かった？」
なかなか言葉が続かない私に、リリカちゃんが腰を撫でながら問い掛けてくる。
「ううん。そうじゃ、なくて……」
（リリカちゃんは何も悪くないのに……これ以上心配させちゃ、ダメだ！）
意を決して、私は言葉を発した。
「お……おしっこが……出ちゃいそうだから……」
なんとか紡ぎ出した言葉は、消えてしまいそうなくらい小さかった。
リリカちゃんに腰を押されるたびに、お腹の中に溜まった水分が、出口へと向かって進もうとする。このまま、腰を押され続けたら、私はきっとおもらしをしてしまうだろう。
（こうなるってわかっていたら、残業中に、コーヒーなんて飲まなかったのに……！）
「だから、お……おトイレ、借りても……いいかな？」
本当はもっとリリカちゃんにマッサージをしてもらいたいという気持ちはある。でも、これ以上続けられたら、本当におしっこが漏れてしまいそうだ。
「なーんだ。そんなことだったんだ」
明るい声でリリカちゃんに言われて、私はホッと息を吐いた。